絲山秋子「海の仙人」を読み解く

第一部 「ファンタジー」を核として読む

◆第一部参加者……叢雲綺、だいぽむ、小泉机、緋雪、イコ

「悲しさ」「孤独」「何か」

叢雲綺：第一印象は悲しかったです。でも「すごく美しい悲しさ」で、読んでいて心を動かされた。

だいぽむ：孤独と寂しさが感じられた。

小泉机：自然体で読めました。ミステリじゃないから人殺しもない。あんまりこういう小説を読んだことがなかったので新鮮でした。

イコ：おれもいろんな意味で新鮮でした。とても読みやすく、エンタメにも片足突っ込んでいるようだけど、たしかに「何か」を感じさせる小説だった。

叢雲綺：その「何か」を確かめたくて二読、三読したわけですが、手のひらをすり抜けて行く砂のような感じで、なかなか難しかったです。

イコ：率直に、みなさんおもしろかったですか？

全員：おもしろかった。

イコ：みんな肯定派か（笑）

映像で浮かぶ文章

小泉机：こんだけのページ数を一気に読んだのは久々。

だいぽむ：読みやすかった。疲れない文章だなあ。

叢雲綺：疲れない、ってのはホントそう思います。

小泉机：しょぼい文ってわけじゃないですよね。しかし疲れない。

イコ：読者に媚びる文章じゃないんですけどね。

小泉机：映画を観ているような気分になりました。キャストがはっきり浮かんできて。片桐は小池栄子以外に誰がやるんだと。

だいぽむ：あー。映像で浮かぶ文章だね。

イコ：この作品、抽象的なことはほとんど出てこないから、映像にしやすいかもしれないね。

「ファンタジー」という存在

イコ：「ファンタジー」はおっさんだ。「ファンタジー」が、ただの概念じゃなくて、実際に人間の形をしているのは、おもしろいことだと思う。

叢雲綺：確かにそうですね。主に概念としてとらえようとしていましたが、人間の形ですもんね。

小泉机：この人、言っていることは大したことないんですよね。そこが面白かったです。

イコ：ファンタジーって、どういう存在だと思いましたか？

緋雪：心が揺れている人間はファンタジーを知っている。自分の人生に不安を感じている人たちは、自然と知っている存在だと感じました。

叢雲綺：私もそれに近いですね。「痛み」をもった人間がファンタジーを知っていると考えました。

イコ：この小説に出てくる人間は大体、ファンタジーを知っていましたね。知らなかったのは、片桐か。

姿を見ることもできない→村井
忘れてしまった→澤田
顔は思い浮かべることができないが、覚えている→河野
元々知らなかったが、覚えているだろう→片桐

緋雪：（澤田が）忘れているっていうのはポイントかもね。

澤田はどうして忘れたのか？

小泉机：澤田って、（ファンタジーだけでなく）河野が来てたことも忘れてましたよね。

緋雪：彼の人生が思う通りに進んでいるからこそ、他の事象については忘れてしまうんだろうね。

イコ：人間は自分の生活に直結する重要事は覚えていようとするけれど、それ以外のことはどんどん忘れて行くからね。澤田はファンタジーを求めないんだろう。

だいぽむ：求めないんだろうか。料理人になるためにフランスへ渡るなんて、いかにもファンタジー。念願かなって返ってきたあと、ファンタジーを忘れた。

緋雪：片桐への片思いのときは求めていたんじゃないかな。

だいぽむ：求めていたけど、求める必要がなくなったんじゃないかな。

小泉机：忘れたっていうのは、もう一度会っても思い出せないってことなんですかね。また出てきたら、「あ、ファンタジーじゃん！」ってノリになるのだろうか？

だいぽむ：澤田はもう見えないんじゃないかな。

叢雲綺：ファンタジーを求めるような出来事がない限り、思い出せない。

イコ：澤田の片思いは完全に消化されてしまったんだろうか。

緋雪：多少は持っているけど、この小説の段階では消えている。

叢雲綺：貝殻を返した段階でふっきれたのでは。片桐が河野に会うことに対しても、「がんばれよ」と言っている。

イコ：おれはそう単純じゃないと思う。確かに片桐の背中を押せるくらいにはなった。「河野」の象徴である貝殻を返すこともできた。けれどこの思いは、胸にしまわれたままになっていると思う。確かに今は生活が充実していて、忘れていられるのかもしれないけれど、いつかまた求めるときが来るかもしれない。思いを外側に出さなくても生きていけるようになることが、大人になるということ。そういう意味で、人間が大人になっていく小説だと読めるけれど、（この小説の後）いつかまたファンタジーと会話しても、おかしくはない。

緋雪：ファンタジーに会う可能性はあるだろうな。

イコ：そもそも「ファンタジー」に魅せられるのは、主には子どもだろう。

片桐は「大人」である

叢雲綺：でもそう考えると、はじめはファンタジーを知らなかった片桐の存在がおかしくないだろうか？

『孤独ってえのがそもそも、心の輪郭なんじゃないか？　外との関係じゃなくて自分のあり方だよ。背負っていかなくちゃいけない最低限の荷物だよ。例えばあたしだ。あたしは一人だ、それに気がついてるだけマシだ』（新潮文庫版　96 頁）

イコ：こんなことが言える人間なんだよな、片桐は。

緋雪：そもそも、一人の男を一途に愛しつつも他の恋人をつくれる段階で大人だ。

イコ：河野が自分に振り向いてくれないことを分かっていて、それをきちんと抱えて行こうとしている。彼女は結局、ファンタジーに頼らない。

だいぽむ：なるほど、彼女は揺るがないんだね。

ファンタジーはただのオッサン

小泉机：僕はファンタジーのことを途中から本当にただのオッサンとして見てたんですけど。ファンタジーって言葉がゲシュタルト崩壊して。

イコ：たしかに「ファンタジー」って言葉のもつ意味は分解されているよね。

小泉机：名前は確かにファンタジーなんだけど、仮に「ビヒダス」でも「みかん」でも、あのおっさんはおっさんで変わらない気がするんですよ。でも「ファンタジー」って名乗ってるからちやほやしてもらえて。「じゃあもうお前は変なじじいでいいや」って思って途中からそういう人だと思うようになりました。

だいぽむ：ファンタジーって名付けは、作者が読者に歩み寄っている感じだ。解釈の方向性を与えてくれている。

河野は「海の仙人」になろうとしている

だいぽむ：ファンタジーとは今よりももっといい自分がありうるんじゃないかという、空想のことだと思った。そういう願望、空想を持たなくなった人には見えない。で、そういう空想を持たない人というのは、いわば仙人のように悟りの境地に至っている。

イコ：河野は「海の仙人」じゃないのか？

だいぽむ：ファンタジーを忘れつつあるから、なりつつあるんじゃないか。だから大人になる過程というよりは、老人になる過程なんじゃないか。現状の自分に満足するまでの過程。

イコ：ふーむ、しかしファンタジーは河野のもとにあらわれる。

叢雲綺：あらわれることには、何らかの意味がありますよね。

イコ：おれはやっぱり河野の孤独は解消されていないと思う。孤独を内に抱えて、河野はたしかに大人になったが、かれはまだファンタジーとの会話を求めている。しかし救いがあるのは、そこに片桐が訪れるところ。ひょっとするとこれから、かれは本当にファンタジーを忘れられるのかもしれない。

うっとうしくない神様

イコ：ファンタジーは、求める人間にとって、うっとうしくなく、ただそこにいてくれる存在だ。とても微妙な距離で、冗談を飛ばしてくれる。おれはこの小説を読んで、ファンタジーのような存在にいてほしいと思った。

叢雲綺：たしかに「ありがたい」神様ですよね。

緋雪：その元々うっとうしくない神様が、「おっと、来客だぞ。俺はこれで失礼する。元気で」と言ったあとに片桐が来るからこそ、河野の孤独が無くなる日がきたのかなと。

イコ：救いにはなるだろうけど、そこまでではないと思う。

緋雪：誰かの小説というならば、これは片桐の小説だ。ひとつの終わり方として、ここで長年の片思いが報われる終わりでもいい。

イコ：澤田の小説でもいいし、片桐の小説でもいい、河野の小説でもいいけれど、ただ一人のための小説ではないと思う。

緋雪：みんなの小説っていうのはありだな。

叢雲綺：私もそう思う。全体の関係とか、一つ一つのやりとりとか全部含めて何かを見せる小説だと思った。

「人とのつながり」を描く

イコ：おれは「人生」をテーマにしているととらえた。身近な人が死んだり、落雷にあったりと、わりとすごい事件がいきなり起きるように見えるけれど、実は人生の長いスパンで考えると、わりとあることかもしれないと思った。人間はそれらに左右されながらも、生きていかなければならない。

叢雲綺：淡々とした語り口が余計そう思わせますね。

小泉机：「あるかもしれない」っていうのは読んだ後すごく感じました。「良かった、これ現実じゃなくて」とも。僕、こんな悲しい人生送りたくないですよ。でも、悲しいばっかりじゃない読後感も印象的だった。

イコ：そうだね、悲しいけれど、わりと肯定的。「受け止める」過程がきちんと描かれているからだ。人はその出来事を経験するときはたった一人（孤独）だが、関係性のなかで、ゆっくりと孤独に向き合えるようになってくる。

小泉机：人と繋がってれば孤独が無くなるわけじゃなくて、逆に孤独と向き合うようになってくるっていうのは面白いですね。

イコ：それは、ファンタジーが（盲導犬などじゃなく）人として出てきたこととも関連すると思う。

叢雲綺：ファンタジーが「人の形」をしていることには、あまり注目できなかったけど、あえて妖精とかじゃなかったのは良かったのかも。

イコ：ファンタジーは会話する。おっさんじみていて、つまらんことを言うけれど、みんな気持ちがほぐれている。

緋雪：おっさんだから良かったかもね。

小泉机：ファンタジーの最後ら辺の「仕事ばかりしていたな、あいつは」っていう台詞が普通に言える距離感っていうのが良い。

イコ：この作者は、人間同士の「距離感」にはとても鋭敏で、安易に登場人物の関係性は崩れない。常に崩れる緊張感をはらみながら、ぎりぎり持続しつづける。かりんとはセックスレスでいつづけるし、片桐は片思いしつづける。

叢雲綺：姉との距離感も縮まらない。結局変わらないまま。

イコ：あと、河野はとにかく敦賀にこだわって、いつづけるよね。この作者は土地へのこだわりも尋常じゃない。

第二部
絲山秋子の「現実」と「非現実」

◆第二部より、三の三の六が参加している。

「非現実」の挿入

イコ：ここで今日参加されていないちぇまざきさんの文章を要約で紹介します。

（ちぇまざき）：海の仙人は「個人主義」の成熟以降の世界。自由と孤独の共存。「非現実感」が登場することに何の悪びれもない。ファンタジーの存在の語りはそこそこに、女の子との出会いの描写ばかりだ。どうなのそれ。フィクションに畏敬の念がないっていうのは、現実に対してゾンザイな付き合い方をしているのと同じじゃないだろうか。

イコ：たしかに絲山さんは、非現実を出すのに悪びれはない。

緋雪：それないだろって思うときはある。でも違和感あんまりないんだよな。

イコ：この人は「沖で待つ」でも幽霊を出した。わりと当たり前に、「非現実」を挿入する。絲山さんは、常識的に目に見え、そこにあるとされる物質的なものから、少しだけ解放された作家だ。

緋雪：登場人物もびっくりしないで、非現実をすぐ受け入れるんだよね。

三の三の六：「非現実」ということでいうと、ファンタジーのような物質に限らず、『逃亡くそたわけ』で見せた、「２０エレのリンネルがどうのこうの」という、呪文が頭の中で反芻されるのも印象的でした。

緋雪：「逃亡～」に関しては、薬の幻覚もあるから、より呪文的で良かった。

ファンタジーには現実味を覚える

叢雲綺：ファンタジーにはある程度現実味を覚えるから不思議です。卵になって寝るときも違和感なかった。

イコ：異分子なんだけど、河野たちの前では重力にしたがっているからね。ただ、卵になって寝るところは、少しクサいと感じた。「クサい」というのは、作られすぎたものの発する、文学クサさというようなもの。

だいぽむ：それならおれは落雷２発のほうが……（笑）

緋雪：ああ、卵になるよなあ、ぐらいでしたね。落雷２発も、こういう人がいてもいいんじゃないかなと。

イコ：落雷２発は自然に受け止めた。そういうことがあるかもしれない。まず「宝くじ３億円」ではじまるわけだから、もうそこをありのまま納得しないと、ただ酷い筋立ての小説になりかねない（笑）

叢雲綺：卵に関しては何の疑問も感じませんでした(苦笑)

三の三の六：そのクサさというのは、村上春樹などがやるような「いかにもな不思議」ではなく、すとんと納得できるような持って行き方ですよね。卵、うん、そりゃなるよね。みたいな。

小泉机：でも、明日になったら卵意外の何かで寝てても不思議じゃない、っていうアバウトさで僕はファンタジーと接したいんですよ。

イコ：なるほどね、じゃファンタジーはおっさんじゃなくてもかまわない？

小泉机：ファンタジーについてあんまり頑なに考えたくないというか、やっぱりファンタジーがいなくてもこの物語は成立するんじゃないか、っていう思いがあるんですよね。いてくれなきゃ困るんだけども。結局このおっさんがいたからこそ、こうなったみたいな流れはないわけで。猫みたいだな、と。

イコ：神様のくせに飯は食うんですよね（笑）

叢雲綺：酒も飲みますしね（笑）

地に足がつかない感じも残る

イコ：おれがさっき言った「文学クサい」感じは、やっぱりぬぐえない。揃いも揃って、ずいぶん都会的な感性の持ち主に見えてしまうんだよな、この人たち。この軽妙洒脱な雰囲気、読みやすさ、人物の関係性、分かる。ぜんぶ分かるし伝わってくるんだけど、決定的なところで地に足がつかない感じも残るのが絲山さんの小説だ。

三の三の六：そこがまた魅力的ですね。

緋雪：彼女自体があまり地についていないもんね。まあ、魅力的だけども（笑）

イコ：まだ作家の気づかぬところに幅があるんじゃないだろうか。

三の三の六：『ニート』所収の「愛なんていらねー」はどうですか。あの作品は、この作家にとっての幅にはなりませんか。

緋雪：あれは絲山らしさが出すぎている気がしますよ。

イコ：幅にはなりません。描写がどぎついから「うっ」となりますが、やはり地に足着かぬ感じがある。この作家には、日常言語から逸脱する「文学の言葉」があって、それにまといつかれているような気すら受ける。身も蓋もない言い方をすると、カッコつけている。

緋雪：何かに「文学」を書かされている感があるんだよな。

イコ：この小説もそうですが、絲山作品の人物には、血が流れている感覚が薄い。「血」を書くのもまた、大切なことじゃないだろうか。

（文責　イコ）